出会い——集会場にて

——その人、吉野啓二さんにはじめて私があったのは、一九七一（昭和四六）年一一月一三日のことでした。この文章を書きはじめている七九（昭和五四）年一〇月のおよそ八年前のことです。土曜日でした。

その日東京港区の芝公園に近い中退金ホールという会場で、私はひとりの婦人の被爆者がくるのをまっていました。

そこは、日本原水協の主催によって、「アムチトカ島核実験抗議・沖縄協定批准反対・被爆者援護法要求・中央全都道府県代表者集会」という集まりが開かれる予定の会場でした。

一〇年間働いていた長崎放送の職場を去ってから、私に一年四ヵ月がすぎていました。東京港区にある、小さなニュースの通信社に勤めるようになってから七ヵ月目、友人数人と小さなグループ「被爆者の声を記録する会」を作って、とりあえずは東京に住んでいる被爆者を対象に、ほそぼそと

録音作業をはじめてから四ヵ月目でした。

広島・長崎・ビキニで実際に核兵器に被災した人たちを訪ねて、そのとき、見、聞き、体験したこと、そのときいらい身の上におこったこと、感じ、考えつづけていることを、その人たち自身の言葉と声で語ってもらって、それを録音に収録すること。収録テープは、将来建設されなければならない、公立の「原水爆被災記念資料館」に寄贈させてもらい、公的な力で保存・公開してもらうこと。それが、私たちが作った小さな会の目標でした。

被爆者の体験をその人々自身の声で残しておきたい。その声は文章や写真、数字やデータでは伝ええない、被爆と被爆者についてのなにかを、未来にむかって語りかけるのではあるまいか。

被爆地で一〇年間ラジオ記者をつとめた私の胸のなかに、それはぼんやりと宿ってきたひとつの予感でした。

まっていた婦人の被爆者は、まもなく会場に現われました。

東京都の被爆者組織が、私に紹介してくれた被爆者のひとりでした。私は録音への協力を頼み、婦人は了承しました。

録音の日どりもきめてもらいました。

用件がすんで、

「どうせ話をきくのなら多いほうがいいんでしょう？　この人なんかもどうかしら。」

婦人はそういって、そばにいたひとりの男の人を私にひきあわせてくれました。

その人が吉野さんでした。

六時半からの開会にはまだ間がありました。窓の外はもううす暗くなっていました。東京の晩秋の夕暮は、長崎より一時間は早くくるように感じられました。参加者は、三百人くらい入りそうな会場の六分か七分くらいの席に着いて、雑談をしたり、挨拶をしあったりしながら開会をまっていました。

明るさをました蛍光灯の光の下で、私はその人のほうをむき、その人をみました。

小学生のように小柄な人でした。四〇歳くらいにみえました。色は黒いほうでした。身長のわりに頭が大きく、額が広く、その下に奥目が窪んでいました。やせて、こめかみの肉はうすく、青く血管が浮いてみえました。頬は細く、唇はうすく、あごはとがっていました。頭髪はベトナムの人々がよくそうしているように、高く刈り上げ、前にたらしていました。

気の毒なようにみすぼらしい身なりであることにも、すぐ気がつきました。

自分で洗濯したものとひとめで判るよれよれのYシャツを着け、ネクタイはしていませんでした。うすねずみ色の上衣。折り目のない黒っぽいズボン。その上にはおった灰色のコート。一度も磨いたことがないのかもしれない、黒の短靴。そのどれもが着古され、はき古されていました。

このような連想が吉野さんにたいして失礼であることは充分承知しています。しかし吉野さんの第一印象がどのようなものであったかを知っていただくために、私は自分が感じたことを事実のままに書かないわけにはいきません。

吉野さんとむきあったとき、私は水上勉の小説「雁の寺」の主人公慈念、作者によって「軀が小さく」「陰気で」「片輪のようにいびつに見え」「頭の鉢が大きく」「額が前にとび出し」「ひっこんだ奥目のどこかにかなしみに充ちた光りがあふれている」――そう描かれた、少年僧慈念を思いうかべたのです。

のちにたしかめたところでは、吉野さんの身長は一五一センチ、体重はこのとき四〇キロでした。これは最近の数字で比べると、中学一年生女子の平均的な身長・体重とだいたい同じです。

私は自己紹介し、私たちがはじめている作業のことを説明しました。

すこし話してみて、すぐに、その人にかなり重度の吃音があることもわかりました。

その人――吉野さんの吃音を、ここに文字にうつして再現することも、吉野さんにたいしてたいへん失礼になるでしょう。しかし吉野さんがどういう人であるか――、というより、吉野さんが負うてきた人生がどのようなものであるかを理解していただくために、すくなくともこのときの最初の会話についてだけは、その失礼をおかすことを許していただかなくてはなりません。この重度の吃音で、吉野さんはのちに五時間以上にわたって、その被爆体験を語ったのです。

被爆した人たちが体験したこと、それからこれまであゆんできた人生を話してもらって、録音に残しておきたい。そうすればこれから先々も、原爆とはどんなものか、被爆者とはどんな人々か、伝わっていくだろう。原爆を二度と使わせないことに役立ててもらえるかもしれない。私はそんなふうに説明しました。

吉野さんは私たちの試みの意図をそくざにのみこんであいづちをうったのですが、それを吉野さんの発音どおりに言葉にうつすとこんなぐあいでした。

「そ、そ、そうですねえ、も、もう、ひ、ひ、ひつような、ことですねえ。か、か、かぞくが、し、しんだ、ときの、よ、ようすや、なんかを、ですねえ。こ、このままだと、わ、わたしたちも、こ、こまかい、ことは、わ、わすれていくし……ひ、ひ、ひばくしゃだって、いつまでも、い、いきている、というわけに、い、いきませんからねえ……。」

吃音の人がだれでもそうであるように、最初の音がどうしてもでてこないため、発音につまってまぶたが閉じたり開いたりするのです。そしてちょうどにわとりが、呑みこみにくいものをやっと呑みくだすときのようすでのどと首を動かして、ひとつの言葉を発音することができるのです。が、すぐに次の言葉の発音につまってしまいます。首の腱と顔の筋肉の苦しそうな動き。前後にゆれる広い額。こめかみの血管のふくらみ。口元にたまる白い唾。それをみれば、その人にとってものをいうことがどれだけ努力を要する作業であるか、判るのです。

それは初対面の者には、強い印象を与えずにはおかぬ容姿とそぶりでした。もしこの人が被爆者であることを知らなかったら、私は吉野さんを、脳性小児まひの後遺症がある人か、なにかの先天的な障害のある人だと思ったかもしれません。

吉野さんの発音をうつすことはもうしませんが、私たちの会話はこんなふうに進行しました。

「吉野さんはどちらで被爆なさったんですか。広島ですか、長崎ですか。」

「長崎です。長崎の城山におったもんですから。」
「そうすると爆心からずいぶん近いところですね。ご家族の皆さんはごぶじだったのでしょうか。」
「お父さんも、お母さんも、兄さんも、姉さんも、皆、死んでしまいました。」
「ご自分のほかに、どなたか、ごぶじだった方はいないのですか?」
「いいえ、だれもいません。だれも帰ってこなかったです。」
「いまはどなたかとごいっしょに?」
「ひとりで、アパートを借りています。病院にかよっています。身体がわるいもんですから。」
きけば生活保護を受けているということでした。

――この人にはぜひ話をお願いしてみたい。私は思いました。
あの日、あのときの話だけに終らぬ被爆体験。正確にいえば被爆者体験。その後の年月、ひとりひとりの生活のなかに刻まれてきた被爆の傷跡。それを、その人の心の内面、人間らしい感情を、最も直接的に表現する、その人自身の声によって記録し、表現したい、そう考えていた私には、吉野さんはぜひ話をしてほしい境遇の人に思えました。
被爆で全滅した家族のただひとりの生きのこり。独り暮らし。病弱。たいへんみすぼらしい身なり。生活保護。東京にいる。この人について判ったのはそれだけでした。が、それで充分でした。
それでも私はちょっとためらいました。

このように重度の吃音の人に質問をあびせ、答えを求めてよいものだろうか。しかもそれを録音したり、あとに残したりしてよいものだろうか。その一問一答が、この人にとっては拷問とおなじに感じられてしまう心配はないだろうか。ケロイドに悩む被爆者に、写真をとらせてほしい、と求めるのとおなじように、そんな頼みじたいが、この人を傷つけることになりはしないだろうか。

しかし結局、私は吉野さんにお話をお願いすることにしました。

その理由は――、というより、その前提になったのは、吉野さんが実にすばやく、私たちのこの試みの意味をのみこみ、理解を示したことでした。

そのときからおよそ八年の間、私と友人たちは約二、〇〇〇人の被爆者にあって、私たちの試みの趣旨を説明し、協力をおねがいしました。そして約一、〇〇〇人の方々の同意をえて、録音をとらせていただきました。同じくらいの数の方々からは同意をいただくことができず、録音を断わられました。

感銘ぶかい、忘れられぬ話をしてくれた被爆者は、さいしょにあって協力をお願いしたとき、同意してもらえるまでに要した時間が短かった。お願いし同意してもらえるまでに長い時間が必要だった場合、感銘深い話をしてもらえた例は多くなかった。

このことを、いま、私は経験によって知っています。

吉野さんの場合も、この経験則に完全に一致していました。

しかしそれにしても、この八年の経験のうちで吉野さんのようにすばやく、私たちの試みの意図

を理解してくれた人は、ほかにさがしあたりません。
このことを、いま、私はこの夕方のふしぎなことのひとつとして思い返すのです。
私はお願いし吉野さんは承諾しました。私たちはそれから、私が録音機を持って吉野さんの住まいを訪ねていってもよい日時をうちあわせました。
自分は通院中で、長い時間、話をすることには医師の許可が要ると思う、場合によってはいちどきに話す時間を制限してもらわなければならないかもしれない、吉野さんはそういいました。
私は同意し、そのほうが自分としても安心だ、と答えました。
会話のなかで、吉野さんの言葉の語尾が、
「(家族は)いましぇん。」
「(電話は)ありましぇん。」
と九州ふうに訛るのを、私は実になつかしくききました。
それから私はふと思いついて、こんなことをたずねました。
「長崎市役所の、いまは何課におられるかなあ、あの吉野さんは、ご親戚かなにかではないんですか?」
じっさい、私が知っている長崎の吉野さんは、背丈こそもっと高くはありましたが、やせて、頭が大きく、額が広く、髪を刈りあげた顔全体の感じが、どことなく、この吉野さんに似ていました。
私はそれをつけくわえて説明しました。

「いいえ、知りましぇん。」
吉野さんはひとこと答えただけでした。
それは同郷の人とあったときにだれでもがする、ごくたわいない質問でした。もし、ふたりの吉野さんが親戚か、知りあいででもあれば、私たちは共通の知人をもっていたことになるわけですから、録音に先だって、すこしは自分に親しみを持ってもらえるかもしれない、そんな期待も私にはありました。
ところがその次に吉野さんにあったとき、自分に似ているその長崎の同姓の人が、被爆のその日から行方の知れない自分の兄ではないかと考えて、ひと晩眠れなかったということを、私はきかされたのです。
自分のたわいない質問が、吉野さんの一夜の安眠をうばうという意外な結果になったことを知って、私は恐縮しました。
他の者にはうかがい知れぬきびしい体験を胸にひそめている人々にとって、どのようななにげない会話や質問も、鋭いやいばになることがあることを知って、粛然としました。
この事実。
たわいない私の質問のせいで、一夜眠ることができなかったと吉野さんが語ったこの事実。
八年たったいま、このことをこの日のふたつめのふしぎなこととして、私はつくづく思いおこすのです。

まもなく集会ははじまりました。
私たちはそれぞれの席にわかれました。
被爆者である吉野さんは集会場の真中の席へ。もともと、この集会に参加するためにきたのではなかった私は最後列へ。
あとから考えると、この夜の集会は、主催者にとってはかなり力を入れたものであったように思われます。
著名な学者や運動家などが、ずいぶんこの集まりに参加していました。
しかし私には、集会そのものについてあまりはっきりした記憶がありません。
集会の参加者が少ないことを気にした主催者団体の事務局長が、うしろの壁を背に傍観者然としてつっ立っていた私のそばにやってきて、
「新聞記者が写真をとるときだけでも席にすわっててよ。枯木も山の賑わいなんだから。」
そう冗談のようにいったこと。
集会の議長団を紹介するとき、その事務局長がすべての人に「先生」の敬称をつけたこと。そんな断片的なことが記憶に残っているだけです。
八年前にちょっと傍聴しただけの集会です。あたりまえかもしれません。
この集会の正式な名称も日時も、この文章を書くために図書館にいって新聞の縮刷版を調べてた

しかめました。

ただこの日は、はじめて吉野さんに出会った日として、私の記憶に残っているのです。

明るさをました蛍光灯の光の下の吉野さんの特異な風貌とその身なり。会話のひとつひとつ。それを私はありありと思い出すことができます。

吉野さんと正面からみあって、少年僧慈念を連想したことを、昨日のことのように思いだします。